南砺市埋蔵文化財調査報告書 34

富山県南砺市

院林遺跡Ⅴ

―主要地方道砺波福光線道路改良事業に
伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告（5）―

2013年1月
南砺市教育委員会

富山県南砺市

院林遺跡 V

―主要地方道砺波福光線道路改良事業に
伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告（5）―

2013年1月
南砺市教育委員会

序

南砺市は、富山県の南西部に位置し、市内にはユネスコの世界遺産に登録された五箇山の合掌造り集落を代表として、数々の文化財が残されています。中でも埋蔵文化財については、分布調査や試掘調査によって、旧石器時代から近世に至る様々な時代の遺跡が市内に数多く残されているとことが分かっています。近年の開発行為に伴って大規模な発掘調査も行われ、多くの掘立柱建物や竪穴住居跡、石器や土器、陶磁器などが見つかりました。

今年度は主要地方道砺波福光線道路改良事業に先立って、院林遺跡の発掘調査を実施しました。本書はその調査成果をまとめたものです。郷土の歴史の解明や学術研究に活用していただければ幸いです。

終わりに、この調査の実施にあたり、富山県土木部、南砺市シルバー人材センター、地元院林地区の皆様には多大なご協力を賜りましたことに、深く感謝申し上げます。

平成25年１月

南砺市教育委員会

教育長　浅　田　　茂

例　言

1．本書は主要地方道砺波福光線道路改良事業に伴う発掘調査概要である。

2．調査は富山県土木部の委託を受け、南砺市教育委員会が実施した。調査面積は　117.69㎡である。

3．調査事務局は南砺市教育委員会文化・世界遺産課におき、世界遺産・文化財係 主任 片田亜紀が調査事務を担当し、文化・世界遺産課長 浦辻一成が総括した。調査の担当及び本書の執筆は世界遺産・文化財係 主任 片田亜紀が行った。

4．発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々の協力･助言があった。記して謝意を表する。
金道善雄、㈲清水重建、神能工務店㈱、森田秀一

5．本書で使用した方位は真北である。土層の観察には、小出正忠・竹原秀雄1967「新版標準土色帖」日本色研事業株式会社を用いた。

6．調査参加者は次のとおりである。
奥野勝子、片田行儀、高下久義、瀧田君子、中島昌治、林長敏、水口則夫、水口善嗣、溝口日出夫、
河合陽子、西川和美

目　次

Ⅰ　位置と環境……1
　第１図　位置と周辺の遺跡
Ⅱ　調査に至る経緯と経過……2
　第１表　遺跡の概要
　第２図　遺跡範囲と調査区位置図
Ⅲ　調査の概要……4
　１　調査の方法……4
　第３図　院林遺跡６地区の調査区割
　２　院林遺跡６地区の概要……5
　第４図　院林遺跡６地区の基本層序
Ⅳ　まとめ……6
参考文献
第５図　院林遺跡６地区平面図
第６図　院林遺跡６地区の遺構
第７図　院林遺跡６地区の遺物
図版１　院林遺跡６地区の遺構
図版２　院林遺跡６地区の遺物（１）
図版３　院林遺跡６地区の遺物（２）
報告書抄録

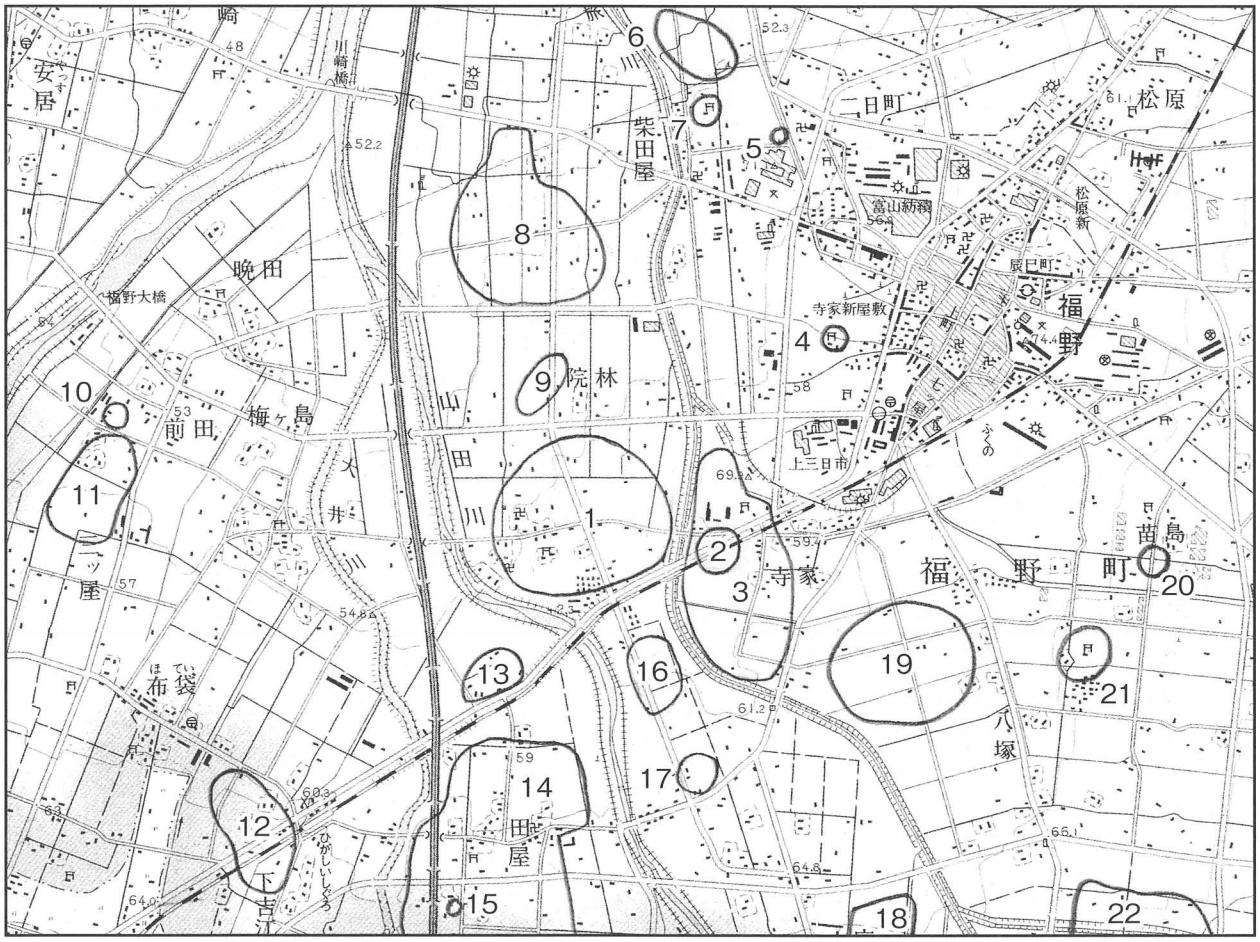
Ⅰ　位置と環境

富山県の南東部に位置する南砺市は、2004年11月に町村合併で成立した市であり、西を石川県金沢市、白山市、東を富山市、北を小矢部市と砺波市に接する。旧井波町と旧城端町は門前町として、旧福野町と旧福光町は市場町として栄え、人口の大半は平野部に集中している。

地形的には、呉羽丘陵、蟹谷丘陵といった低丘陵と、険しい山々が連なる飛騨山地に囲まれ、平野部は庄川と小矢部川によって形成された複合扇状地が広がる。庄川は旧荘川村の山中峠の湿原を水源とし、全長は約115kmで、日本でも最大級の庄川扇状地を形成している。小矢部川は庄川扇状地の勢いに押されて、砺波平野の西端部をゆるやかに流れ、庄川の排水河川の役割も果たしている。この一帯は屋敷林に囲まれた農家が水田の中に点在する山村景観が広がり、西日本の平野部に認められる環濠集落に代表される集村景観と対比され、全国的にも有名である。

院林遺跡は、南砺市の北部、旧福野町内の大字「院林」と「寺家」地内に所在する。小矢部川の支流である旅川と山田川に挟まれた標高56～58mを測る段丘の縁辺部に立地する。史料によると、この辺りは古くから集落が成立し11世紀後半頃には院林郷が成立した。院林郷の地頭職は度々の停止、安堵を繰り返し、院林氏により世襲された時期もあったと考えられる。しかし14世紀を最後に院林氏の名は文献史料では確認できず、この後没落していったと考えられる。

院林遺跡の旅川を挟んだ東側に寺家廃寺跡が隣接する。寺家地区の日吉社に側柱礎石、水田に塔心礎と考えられる礎石が残っている。それぞれ、「夫婦岩（要岩）」、「皇孫塚（鏡石）」と呼ばれ、市の文化財に指定されている。寺院に関しての記録はないが、礎石の型式や周辺の採集遺物から平安時代頃が建立時期と考えられる。



第１図　位置と周辺の遺跡　（S＝１：25,000）

１．院林遺跡　２．寺家廃寺跡　３．寺家遺跡　４．寺家新屋敷館跡　５．礼拝塚　６．柴田屋北浦遺跡
７．柴田屋館跡　８．柴田屋川西遺跡　９．院林北遺跡　10．前田館跡　11．前田遺跡　12．下吉江遺跡
13．田尻北遺跡　14．田尻遺跡　15．田尻丸塚　16．広安北２遺跡　17．広安北１遺跡
18．広安南遺跡　19．八塚遺跡　20．苗島神明社遺跡　21．八塚神明社遺跡　22．八塚殿林遺跡

Ⅱ　調査に至る経緯と経過

主要地方道砺波福光線は、富山県西部の砺波市、南砺市福野、福光の中心市部を結び、国道156号と国道304号を連絡する総延長約12.8kmの幹線道路である。また、北陸自動車道の砺波ICと東海北陸自動車道の福光ICへのアクセス道路となっている。しかし、幅員狭小で慢性的な渋滞があり、歩道を整備し歩行者の安全を確保する等の面から、早急に整備することが求められ、順次改良工事が行われている。寺家地区から田尻地区の区間1.4kmでは平成12年に都市計画がなされた。この区間には住宅密集地があり、南にＪＲ城端線が並行して走っているため現位置での拡幅余裕がなく、新たに北側に幅20ｍの道路を建設するものである。その後平成14年には事業採択がなされ調査、設計、用地交渉などが始められた。

バイパスルート上には、周知の遺跡として寺家遺跡、寺家廃寺跡、院林遺跡、田尻北遺跡が存在する。しかし、道路起点と終点位置の制約などによって路線位置はおのずと決定され、遺跡を回避する事は不可能であったため、遺跡の保護策については記録保存対応とならざるを得なかった。

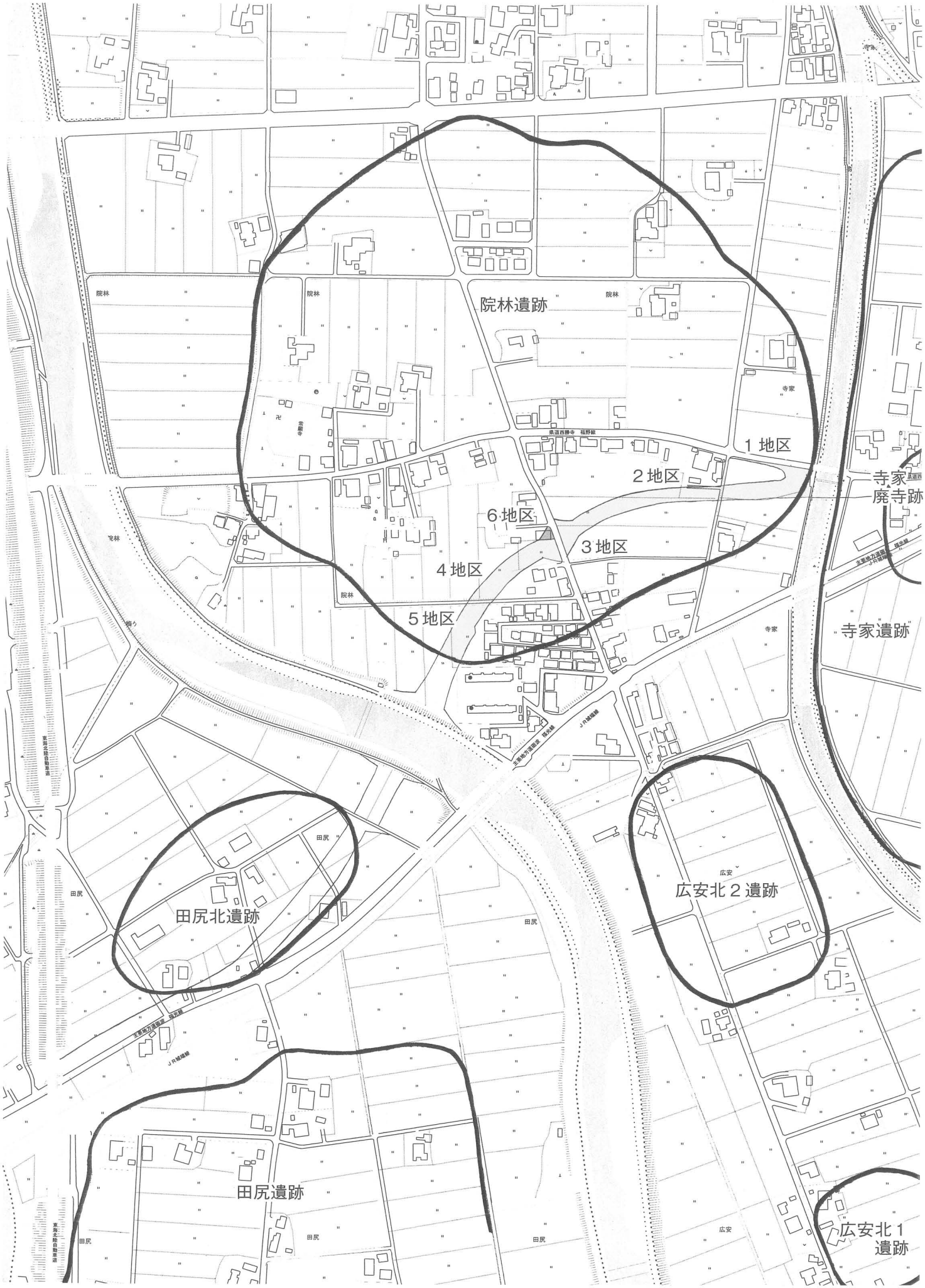
平成16年3月、当時の福野町教育委員会は富山県の依頼を受け、道路用地買収を完了した寺家遺跡の一部で、また平成17年9月には、南砺市教育委員会が旅川以西の延長400ｍの区間、院林遺跡で試掘調査を実施し、対象区域の全域にわたって古代～中世の遺構・遺物が存在することを確認した。これらの調査結果を受け、富山県と南砺市の間で協議し、路線内の遺跡が遺存している箇所について、本調査を行うことになった。以降、試掘調査と並行して平成18年3月から本調査を行っている。なお平成19年には田尻北遺跡の路線内を試掘したが、遺構は発見しなかった。

本調査面積は、次のとおりである。

平成18年度	院林遺跡１地区、２地区	4,300㎡	（民間調査会社へ委託）
平成19年度	院林遺跡３地区	1,560㎡	（南砺市教育委員会直営調査）
	寺家廃寺跡１地区	1,460㎡	（　〃　）
平成20年度	寺家廃寺跡２地区	376㎡	（民間会社へ委託）
	院林遺跡４地区	1,955㎡	（　〃　）
	院林遺跡５地区	1,155㎡	（　〃　）
平成24年度	院林遺跡６地区	117.69㎡	（南砺市教育委員会直営調査）

第１表　遺跡の概要

遺　跡　名	所属時代	発見された遺構	発　見　さ　れ　た　遺　物
院林遺跡	古代、中世、近世	竪穴住居、掘立柱建物、柵跡、井戸、土坑、溝、柱穴	縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、製塩土器、珠洲、白磁、青磁、越中瀬戸、伊万里、肥前、土錘、円面硯、ふいごの羽口、打製石斧、硯、石鍋、銅銭、下駄、刀子、鉄滓
寺家廃寺跡	古代	礎石、柱穴、土坑、溝	土師器、須恵器、珠洲、越前、白磁、青磁、瀬戸美濃、ふいごの羽口、凹石、石鉢、石臼、五輪塔、楔、漆器、齋串
寺家遺跡	古代、中世、近世	竪穴住居？、掘立柱建物、土坑、溝、柱穴	土師器、須恵器、土師器、珠洲、近世陶磁
田尻北遺跡	古代、中世、近世	竪穴住居、土坑、柱穴、溝	土師器、須恵器、珠洲、近世陶磁



第２図　遺跡範囲と調査区位置図　（S＝1：5,000）

Ⅲ　調査の概要

1．調査の方法

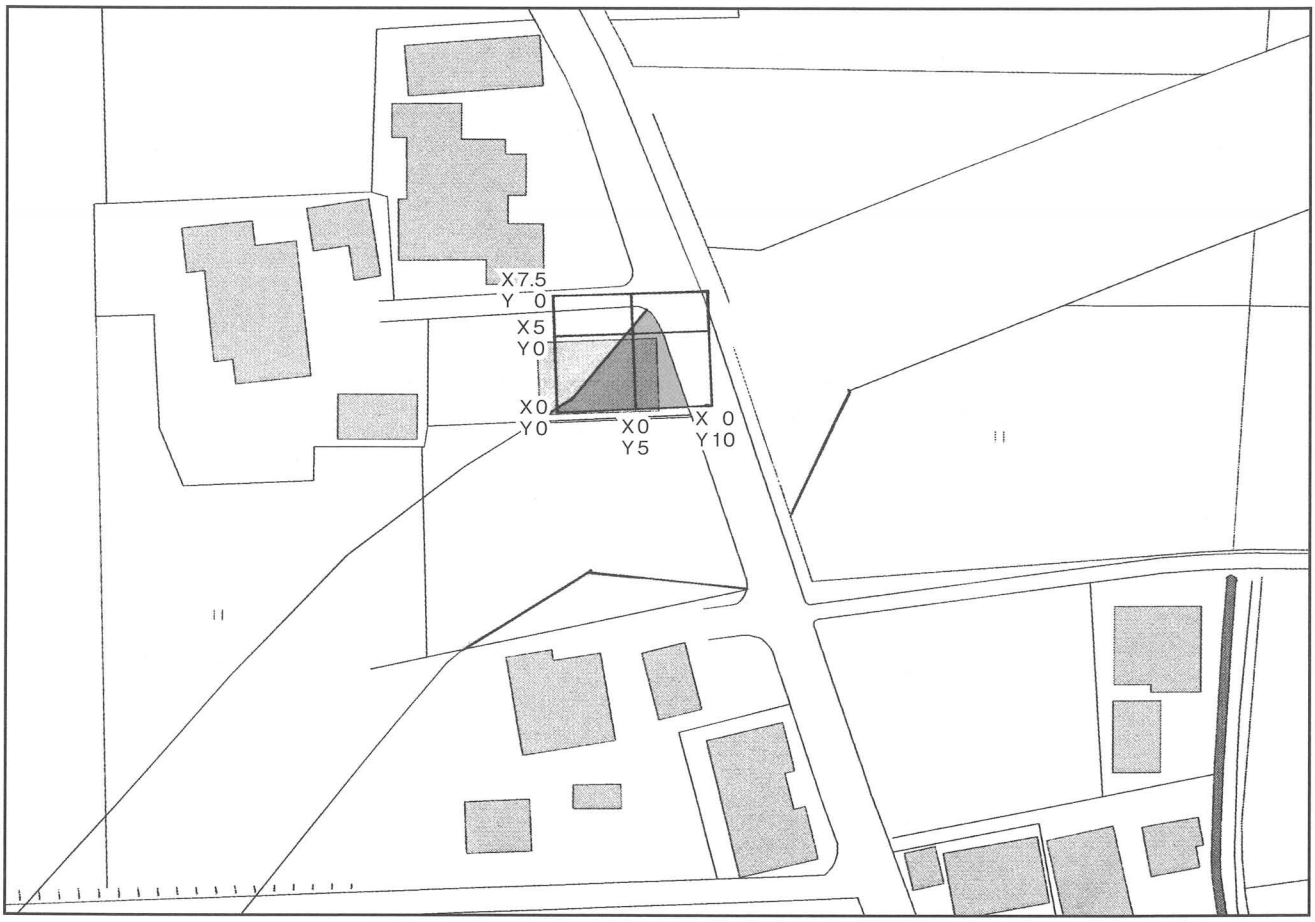
調査区域の設定後、試掘調査の結果に基づき、調査員の立会いのもとで表土除去を行った。表土除去には重機を使用し、表土及び、近代の盛土の層まで掘削し、調査区の外に搬出した。

表土除去後に、調査区に合わせたおおよその東西方向、南北方向に基準杭を設置して調査区割りを行った。区割りは南から北にＸ軸、西から東にＹ軸とし、２ｍを一区画としてアラビア数字で表記した。

掘削は地山面まで掘り下げて層位を観察した。一部にセクションベルトを残して層位を確認しながら、人力による包含層掘削、遺構検出、遺構掘削を行った。遺構の掘削は埋土の堆積状況を観察するため半截するか、セクションベルトを２～３本残して掘削し、土層の記録作業が終わり次第完掘した。廃土は人力とで調査区外へ搬出した。

遺構は検出後、1:100で概略図を作成して、遺構毎に通し番号をつけた。遺構の検出状況や土層、遺物の出土状況は調査員と調査補助員が手実測により図化した。各遺構の検出状況、土層断面、完掘状況などの記録写真、調査区のブロック写真、全体写真は調査員が撮影した。遺構の完掘が終了したものから、調査員と調査補助員の手実測により1：20で平面図の作成を行った。

出土遺物は、現地作業と並行して、洗浄・バインダー処理・注記・仕分けの整理作業を行った。接合、復元は現場作業中止時や、現場終了後に行った。遺物実測やトレース等は基準を統一し、調査員と整理員で図版を作成した。写真や図版は年度・遺跡・地区毎にファイルにまとめ、出土遺物は報告書の写真図版のとおりに整理箱に収めた。またそれ以外の遺物は地区の遺構毎、グリット毎にならべて整理箱に収めた。



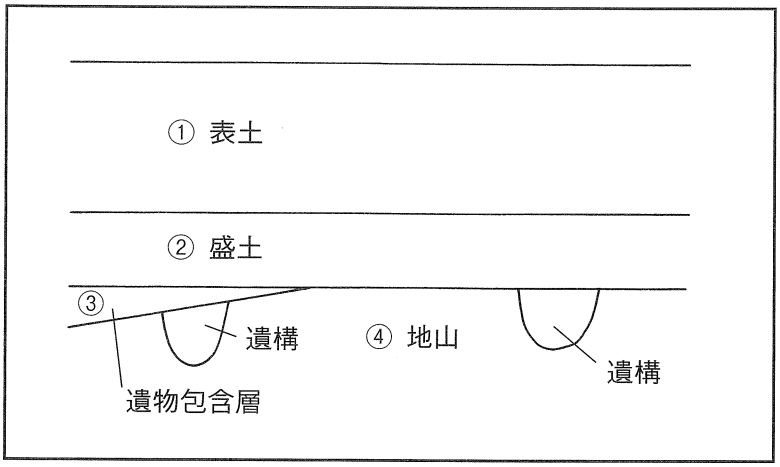
第３図　院林遺跡６地区の調査区割（S= １：1,000）

2．院林遺跡６地区の概要

（1）地形と基本層序（第４図）

院林遺跡６地区は旅川と山田川にはさまれた河岸段丘上に立地し、標高56～58ｍを測る。院林遺跡の南東側に位置し、平成20年度に調査した４地区と南側で接している。

基本層序は地山（にぶい黄褐色）、遺物包含層（黒褐色）、近世以降の盛土（灰オリーブ色）、表土の順に堆積している。地表面から地山までは約0.7ｍである。



第４図　院林遺跡６地区の基本層序

（2）遺構の概要

ＳＢ01（第６図、図版１）

調査区の南側、Ｘ０～１、Ｙ１～３に位置し、東西方向に幅2.5ｍの等間隔で柱穴が並ぶ。平成20年度に調査した４地区の掘立建物ＳＢ01と関連があると考えられる。柱穴列の西側は調査区外となる。柱穴の規模は、Ｐ１が直径約0.6ｍの円形を呈し、深さは約0.35ｍ、埋土はやや明るい黒褐色シルトに地山が混じる。Ｐ15を切る。Ｐ２は一辺が約0.8ｍの方形を呈し、深さは約0.4ｍ、埋土は地山が混じる黒褐色土中心に３層に分けられ、若干炭化物が混じる。Ｐ２から須恵器・蓋が出土している。

ＳＫ05（第６図、図版１）

調査区の中央、Ｘ０～１、Ｙ３～５付近に位置する。東西方向は約２ｍ、南側は調査区外に延びるため、遺構の全容は不明である。深さは約0.8ｍ～１ｍであり、埋土は地山が混じった黒色粘質土を中心に２層に分けられ、粗砂や、１cm大の礫が混じる。東側をＰ22に切られる。須恵器・甕の体部破片が２点出土している。

ＳＤ01（第６図、図版１）

調査区の北側、Ｘ２～３、Ｙ４～７付近に位置する。幅約2.9ｍ、深さ約1.1ｍを測る。西側は調査区外に伸び、東側はＹ７付近が終点である。壁面はやや急に立ち上がり、底面は平坦で、断面形は逆台形状である。上層の、炭化物が多く混じった黒褐色粘質土層から完形の土師器椀11点、土師器15点をはじめ、須恵器・蓋や甕、土師器片が多数出土している。土師器は概ねが12世紀～13世紀頃のものである。下層は、暗褐色砂礫土を中心とし、遺物の出土はない。

ＳＤ02（第６図、図版１）

調査区の中央寄りやや南側、Ｘ１～２、Ｙ３～５付近に位置する。ＳＤ01にほぼ並行しており、幅約1.4ｍ、深さ約0.6ｍ、埋土は黒褐色土を中心に４層に分けられる。上層には炭化物が多く混じる。壁面は急に立ち上がり、底面は平坦である。Ｐ17を切る。西側でほぼ直角に屈曲し、ＳＤ01と合流し、調査区外に延びる。東側Ｙ５付近が終点である。出土遺物に、須恵器・蓋、有台杯、甕の体部破片がある。

（3）遺物の概要

Ｐ17（第７図、図版２）

１は土師器・皿である。非ロクロ成形で、口縁部は１段ナデを施す。底部と体部の境は不明瞭である。時期は12世紀～13世紀頃と考えられる。２は土師器・椀の底部である。底部と体部の境は明瞭である。

ＳＢ01－Ｐ２（第７図、図版２）

３は須恵器・蓋である。つまみは扁平なボタン形状であり、口縁部は欠損している。

ＳＫ04（第７図、図版２）

4は須恵器・有台杯である。高台はやや外側にむけて踏ん張る。5は須恵器・甕の体部破片である。内面に同心円状の当て具痕、外面にはたたき目が見られる。

ＳＫ05（第７図、図版２）

6、7は須恵器・甕の体部破片である。内面に同心円状の当て具痕、外面にはたたき目が見られる。

ＳＤ01（第７図、図版２、３）

８は須恵器・蓋である。口径17cm、つまみ部分は欠損している。9は須恵器・甕の体部破片である。10～23は土師器・椀である。うち10～18はほぼ完形に復元できる。いずれもロクロ成形の土師器・椀であり、底部に糸切り痕が見られるが、磨耗が激しい。底部からやや内湾して立ち上がり、途中でわずかに薄くなり、そのまま直線的にのびるものが多い。口径は約14～15cm、器高は４cmのものが多い。24～41はロクロ成形の土師器・皿である。うち24～38はほぼ完形に復元できる。底部に糸切り痕が見られるが、磨耗が激しい。底部からわずかに外反しながら立ち上がり、体部上半は内湾する。ほとんどが口径は約9～10cm、器高は約2cmである。42は土師器の柱状高台である。体部は欠損している。43は土師器・皿である。中心部に孔を穿つ。

ＳＤ02（第７図、図版３）

44は須恵器・蓋である。端部に丸みを持つ。45、46は須恵器・有台の杯である。どちらも高台が外側へ踏ん張る形態である。47は須恵器・甕の体部破片である。

Ⅳ　まとめ

院林遺跡６地区

・今回調査した６地区では掘立柱建物１棟、溝２条、土坑３基、柱穴を検出した。しかし調査区が狭いため、どの遺構も全容を検出することはできず、詳しい性格は分かっていない。

・掘立柱建物は４地区で検出したＳＢ01と関連があると考えられ、17～18世紀に帰属すると思われる。また建物東側のＳＫ05は建物に関連した土坑であると考えられる。

・ＳＤ01はこれまでの調査で検出してきた区画溝と主軸がほぼ同じであり、形状にも類似する点がある。出土遺物から見ても、12～13世紀頃に機能した区画溝と考えられる。またＳＤ02も同様の役割を果たしていたと考えられる。

参考文献

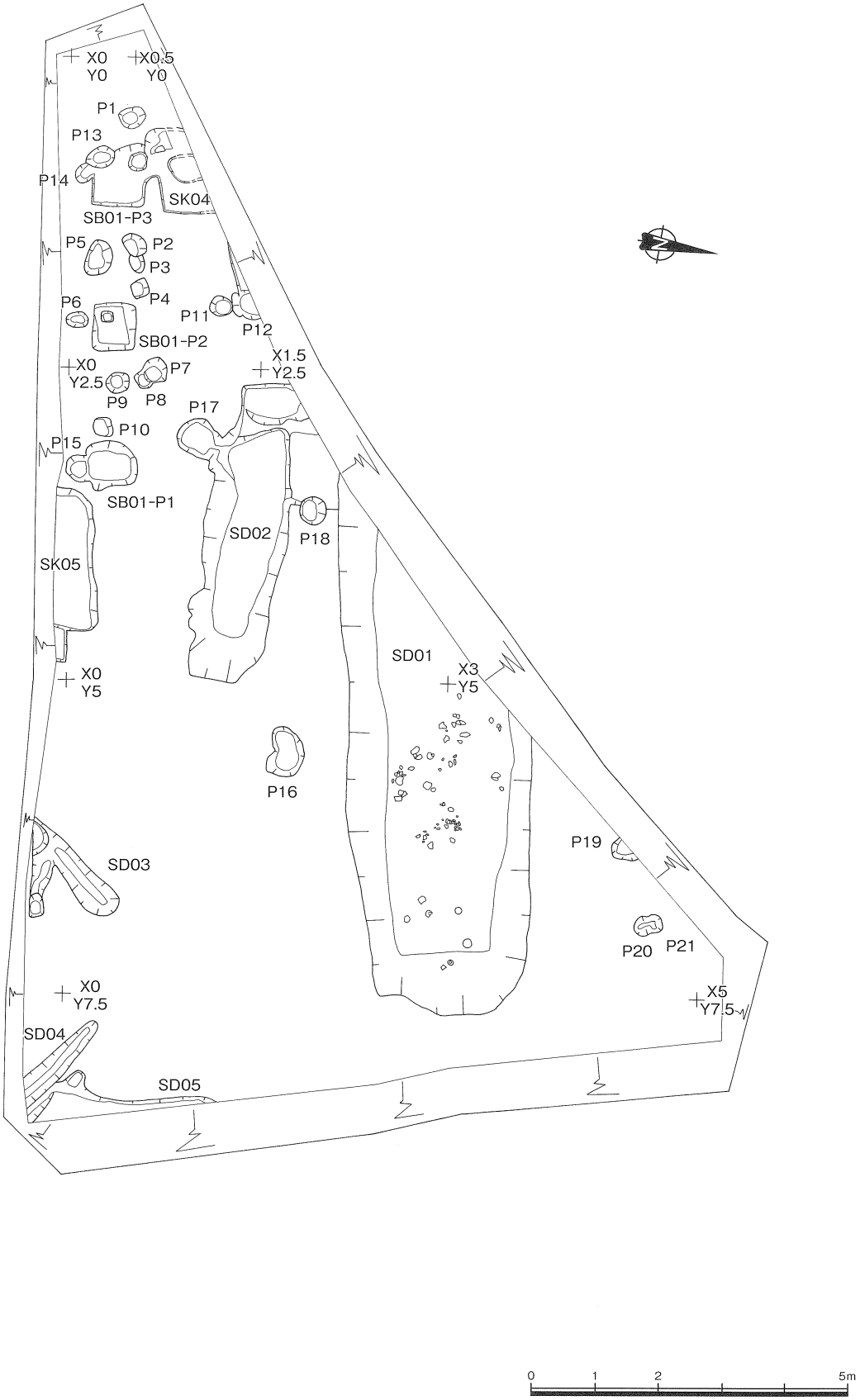
富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所1996『梅原胡摩堂遺跡（遺物編）』

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所1994『梅原胡摩堂遺跡（遺構編）』

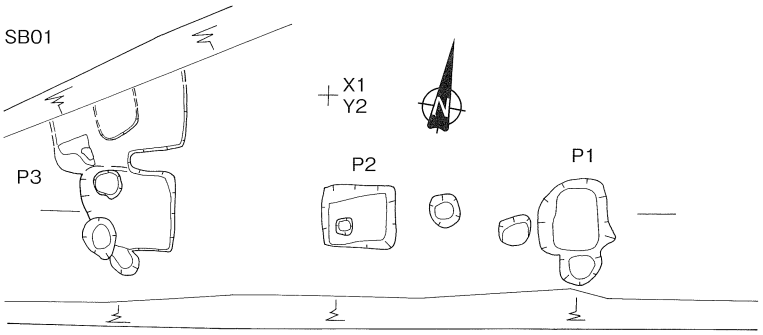
福野町史編纂委員会1991『福野町史　通史編』

福光町教育委員会2001『在房遺跡Ⅰ』

舟橋村教育委員会2000『浦田遺跡発掘調査報告（３）』



第５図　院林遺跡６地区平面図（S= １：100）

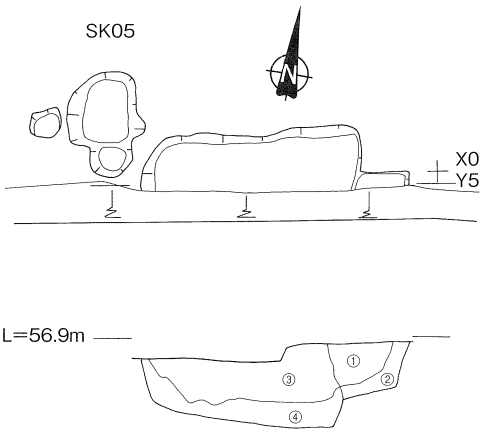


SB01

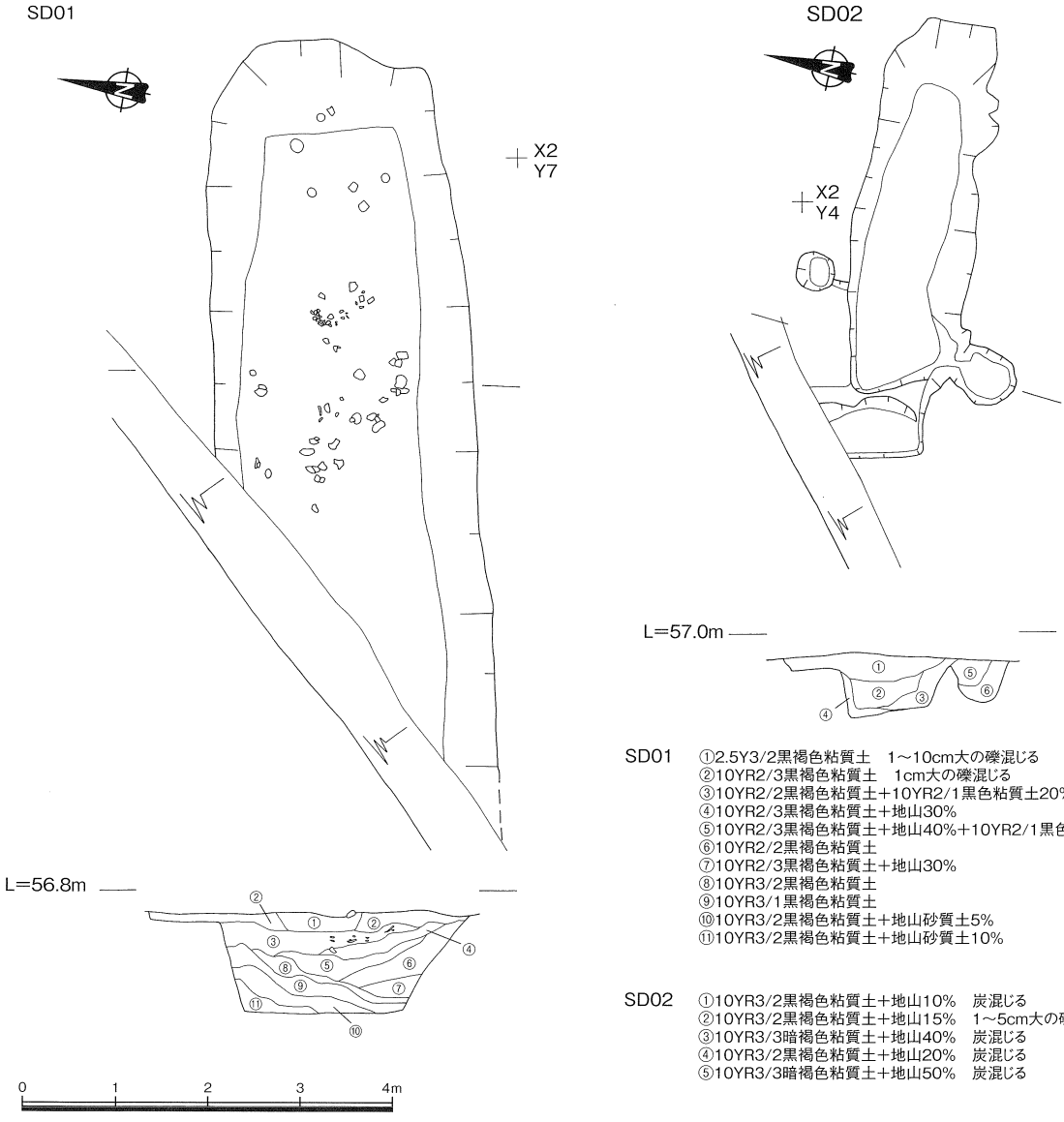
P1
①10YR3/2黒褐色粘質土＋地山5%＋10Y2/2黒褐色粘質土10%　炭混じる
②10YR3/2黒褐色粘質土＋地山10%＋10YR2/2黒褐色粘質土5%
③10YR2/2黒褐色粘質土＋地山40%＋10YR3/2黒褐色粘質土5%

P2
①10YR3/3暗褐色粘質土＋地山1%　炭混じる
②10YR3/2黒褐色粘質土＋地山20%＋　炭混じる
③10YR2/1黒色粘質土＋地山30%

P3
①10YR3/3暗褐色粘質土＋地山1%
②10YR3/2黒褐色粘質土＋地山20%



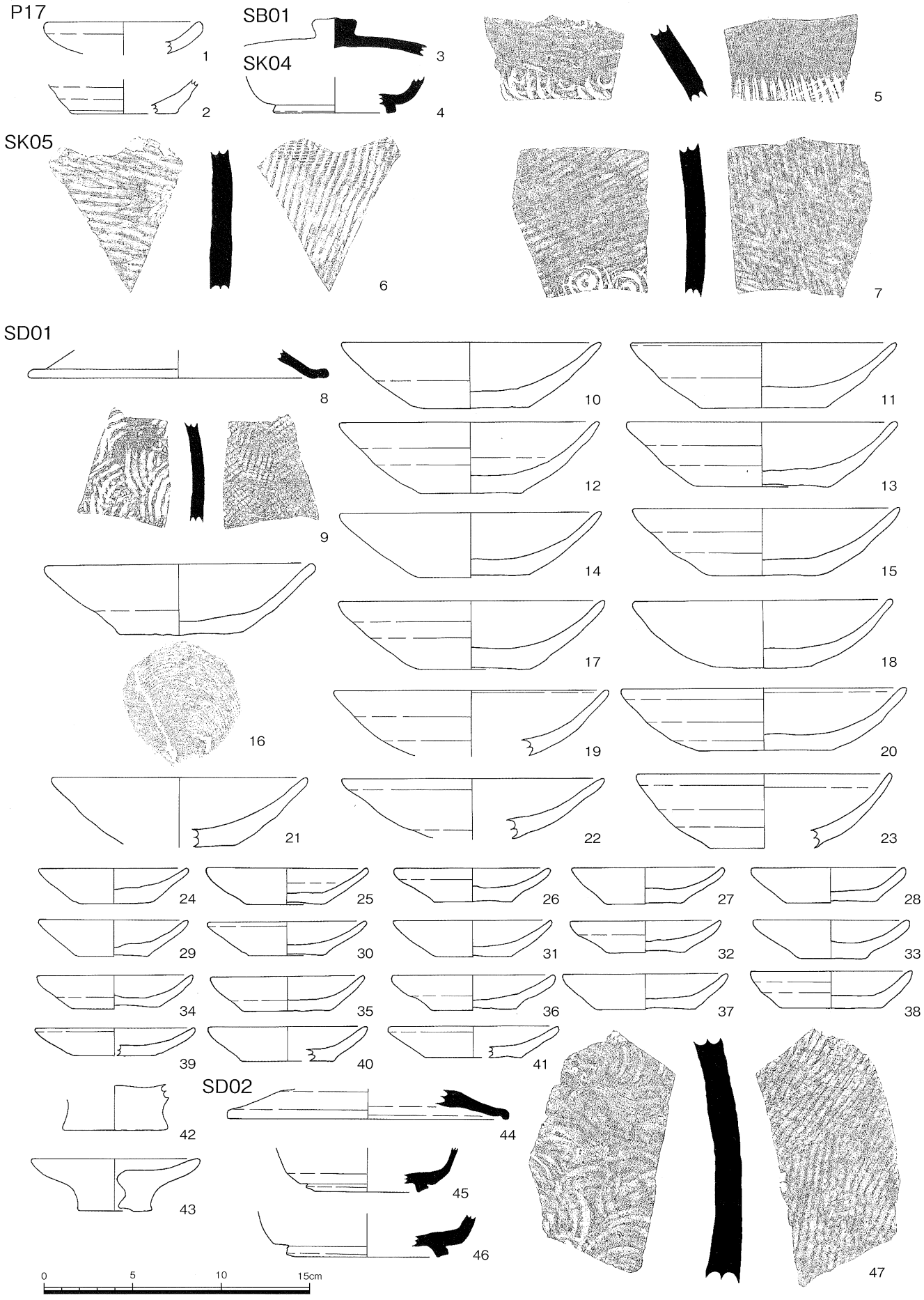
SK01
①10YR2/2黒褐色粘質土＋地山1%　粗砂、1cm大の礫混じる
②10YR2/2黒褐色粘質土　粗砂混じる
③10YR3/2黒褐色粘質土＋地山10%　粗砂混じる
④10YR3/2黒褐色粘質土＋地山20%　粗砂、1～3cm大の礫混じる



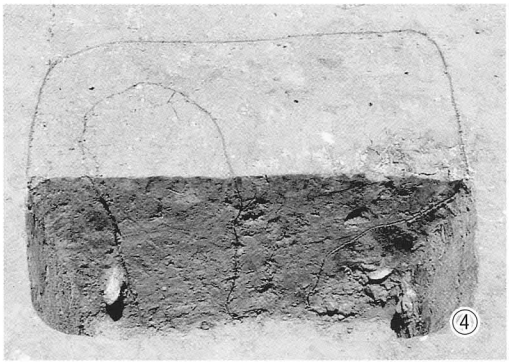
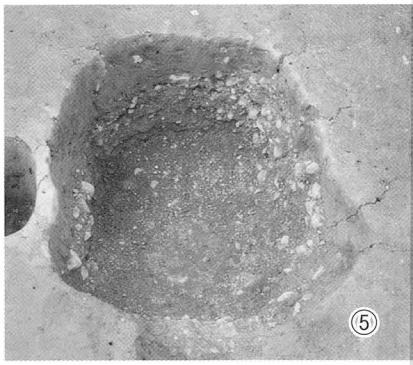
SD01
①2.5Y3/2黒褐色粘質土　1～10cm大の礫混じる
②10YR2/3黒褐色粘質土　1cm大の礫混じる
③10YR2/2黒褐色粘質土＋10YR2/1黒色粘質土20%　炭多く混じる
④10YR2/3黒褐色粘質土＋地山30%
⑤10YR2/3黒褐色粘質土＋地山40%＋10YR2/1黒色粘質土5%
⑥10YR2/2黒褐色粘質土
⑦10YR2/3黒褐色粘質土＋地山30%
⑧10YR3/2黒褐色粘質土
⑨10YR3/1黒褐色粘質土
⑩10YR3/2黒褐色粘質土＋地山砂質土5%
⑪10YR3/2黒褐色粘質土＋地山砂質土10%

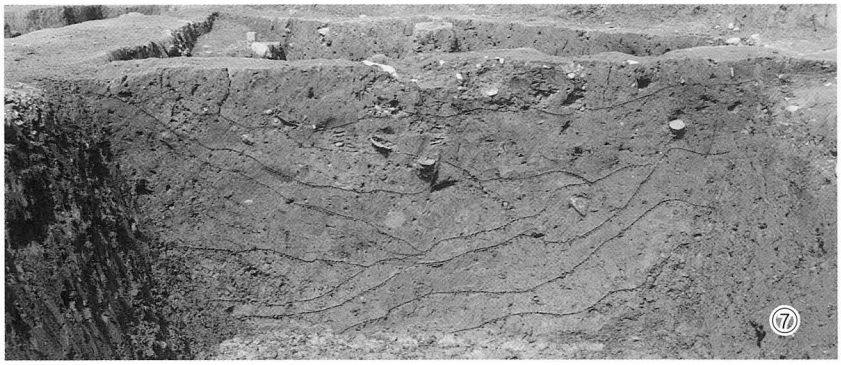
SD02
①10YR3/2黒褐色粘質土＋地山10%　炭混じる
②10YR3/2黒褐色粘質土＋地山15%　1～5cm大の礫まじる
③10YR3/3暗褐色粘質土＋地山40%　炭混じる
④10YR3/2黒褐色粘質土＋地山20%　炭混じる
⑤10YR3/3暗褐色粘質土＋地山50%　炭混じる

第６図　院林遺跡６地区の遺構（S= 1：80）



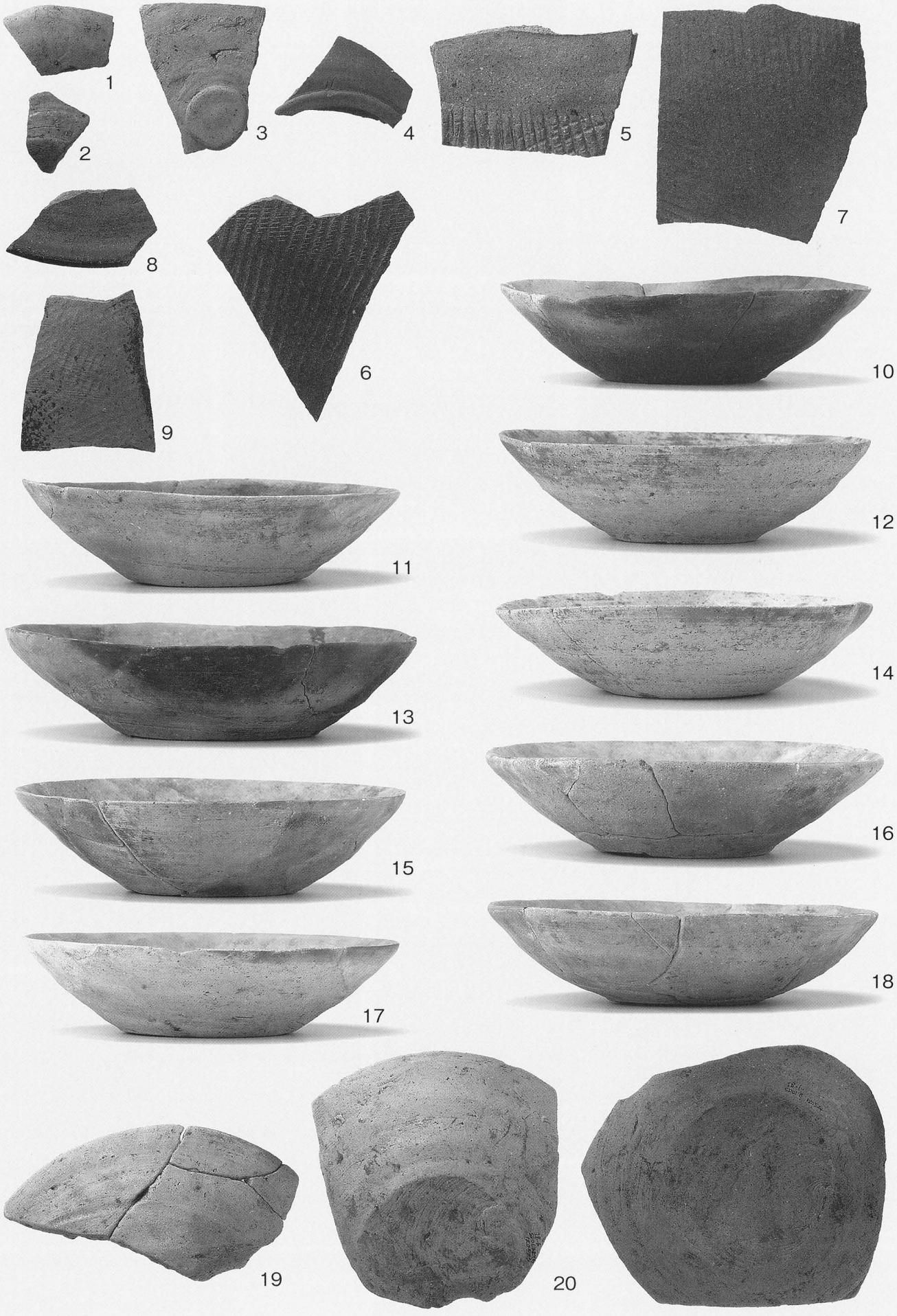
第７図　院林遺跡６地区の遺物（S＝１：３）

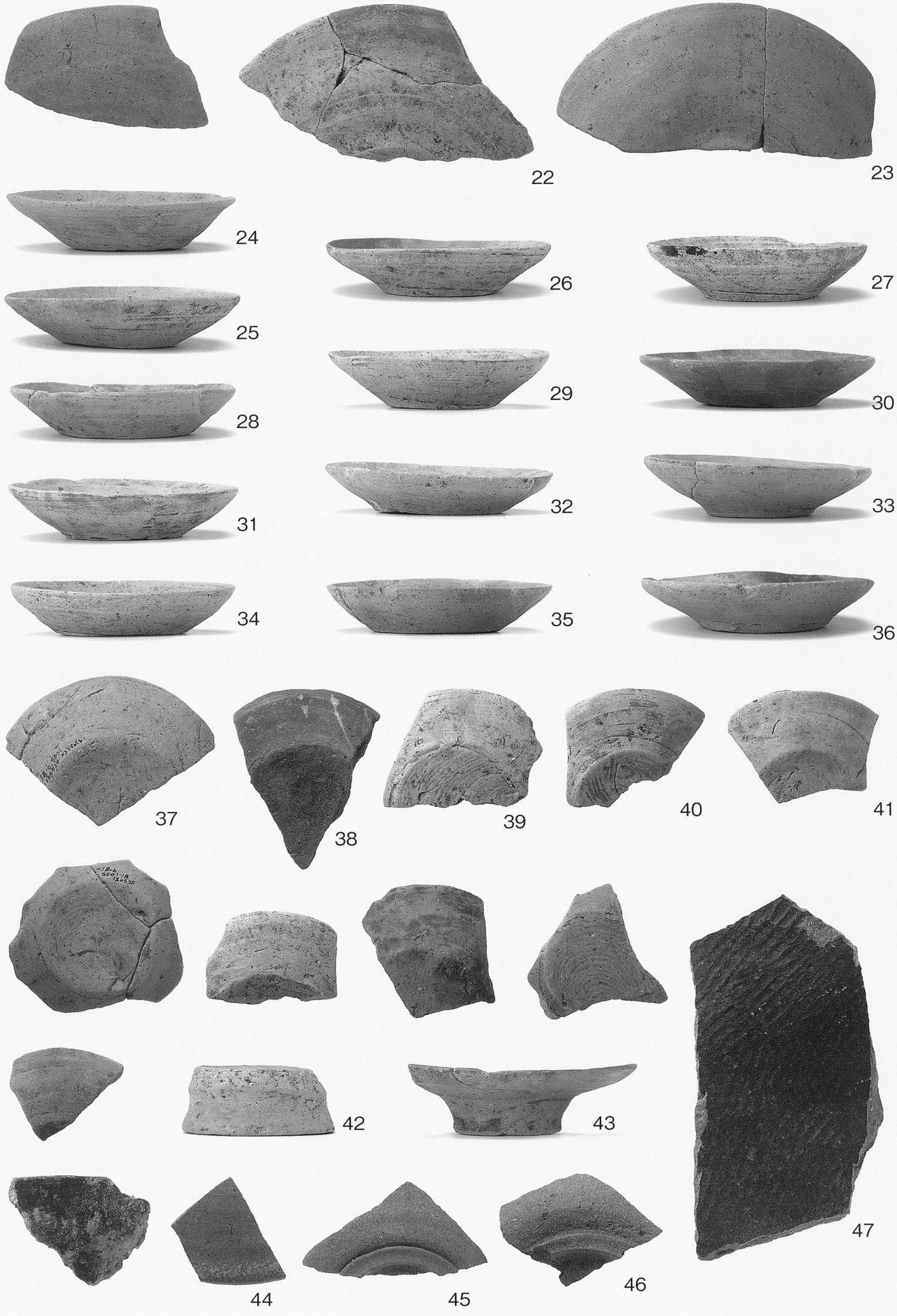


図版１　院林遺跡６地区の遺構

①全景　②SB01（西から）　③SB01－P3土層（南から）　④SB01－P2土層（南から）　⑤SB01－P1完掘状況（南から）
⑥SD01遺物出土状況　⑦SD01土層（東から）　⑧SD01完掘状況（東から）　⑨SD02土層（東から）　⑩SD02完掘（東から）



図版２　院林遺跡６地区の遺物（1）



図版３　院林遺跡６地区の遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	とやまけんなんとしいんばやしいせきご
書名	富山県南砺市　院林遺跡Ⅴ
副書名	主要地方道砺波福光線道路改良事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告（５）
シリーズ名	南砺市埋蔵文化財調査報告書　34
編著者名	片田亜紀
編集機関	南砺市教育委員会
所在地	〒932－0292　富山県南砺市井波520　TEL（0763）23－2014
発行年月日	西暦2013年1月21日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
いんばやしいせき 院林遺跡	とやまけん 富山県 なんとしいんばやし 南砺市院林	16210	244	36° 35′ 03″	136° 54′ 32″	120517 ～120601	117.69㎡	主要地方道 砺波福光線道路 改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
院林遺跡	集落	古代	柱穴	須恵器、土師器	
		中世	掘立柱建物、土坑、溝	中世土師器、	
		近世	土坑、河跡	近世陶磁	

富山県南砺市　院林遺跡Ⅴ

平成25年1月

編集　南砺市教育委員会
発行　南砺市教育委員会

印刷　牧印刷株式会社